

断崖の錯覚

黒木舜平（太宰治）

その頃の私は、大作家になりたくて、大作家になるためには、たとえばどのようなつらい修業でも、またどのような大きい犠牲でも、それを忍びおおせなくてはならぬと決心していた。大作家になるには、筆の修業よりも、人間としての修業をまずして置かなくてはかなうまい、と私は考えた。恋愛はもとより、ひとの細君を盗むことや、一夜で百円もの遊びをすることや、牢屋へはいることや、それから株を買って千円もうちたり、一万円損したりすることや、人を殺すことや、

すべてどんな経験でもひととおりはして置かねばいい作家になれぬものと信じていた。けれども生れつき臆病ではにかみやの私は、そのような経験をなにひとつ持たなかった。しようど決心はしていても、私にはとても出来ぬのだった。十銭のコーヒーを飲みつつ、喫茶店の少女をちらちら盗み見るのにさえ、私は決死の努力を払った。なにか、陰惨な世界を見たくて、隅田川すみだがわを渡り、或る魔窟へ出掛けて行ったときなど、私は、その魔窟の二三丁てまえの小路で、もはや立ちすくんで了しまった。その世界から発散する臭気に窒息しかけたのである。私は、そのようなむだな試みを幾度

となく繰り返し、その都度、失敗した。私は絶望した。私は大作家になる素質を持っていないのだと思った。ああ、しかし、そんな内気な臆病者こそ、恐ろしい犯罪者になれるのだった。

二

私が二十歳になったとしの正月、東京から汽車で三時間ほどして行ける或る海岸の温泉地へ遊びに出かけた。私の家は、日本橋呉服問屋であつて、いまとちがつて、その頃はまだ、よほどの財産があつたし、私はま

たひとり息子でもあり、一高の文科へもかなりの成績
ではいったのだし、金についてのわがままも、おなじ
年ごろの学生よりは、ずっと自由がきいていた。私は、
大作家になる望みを失い、一日いっぱい溜息ためいきばかり吐
いていたし、このままでいてはついには気が狂つて了
うかも知れぬと思い、せつかくの冬休みをどうにか有
効に送りたい心もあつて、その温泉行を決意したので
あつた。私はそのころ、年若く見られるのを恥かし
がっていたものだから、一高の制服などを着て旅に出
るのはいやであつた。家が呉服商であるから、着物に
対する眼もこえていて、柄の好みなども一流であつた。

黒無地の紬つむぎの重ねを着てハンチングを被りかぶ、ステッキを持って旅に出かけたのである。身なりだけは、それでひとかどの作家であった。

私が出かけた温泉地は、むかし、尾崎紅葉の遊んだ土地で、ここの海岸が金色夜叉こんじきやしやという傑作の背景になった。私は、百花楼というその土地でいちばん上等の旅館に泊ることにきめた。むかし、尾崎紅葉もここへ泊ったそうで、彼の金色夜叉の原稿が、立派な額縁のなかにいれられて、帳場の長押ながしのうえにかかっていた。

私の案内された部屋は、旅館のうちでも、いい方の

部屋らしく、床には、大観たいかんの雀の軸がかけられていた。私の服装がものを言ったらしいのである。女中が部屋の南の障子しょうじをあけて、私に気色を説明して呉くれた。

「あれが初島でございます。むこうにかすんで見えるのが房総の山々でございます。あれが伊豆山。あれが魚見崎。あれが真鶴崎。」

「あれはなんです。あのけむりの立っている島は。」私は海のまぶしい反射に顔をしかめながら、できるだけ大人びた口調で尋ねた。

「大島。」そう簡単に答えた。

「そうですか。景色のいいところですね。ここなら、

おちついて小説が書けそうです。」言つて了つてからはつと思つた。恥かしさに顔を真赤にした。言い直さうかと思つた。

「おや、そうですか。」若い女中は、大きい眼を光らせて私の顔を覗きこんだ。のぞ運わるく文学少女らしいのである。「お宮と貫一さんも、私たちの宿へお泊りになられたんですつて。」

私は、しかし、笑うどころではなかった。うっかり吐いた嘘のために、氣の遠くなるほど思いなやんでいたのである。言葉を訂正することなど、死んでも恥かしくてできないのだった。私は夢中で眩つぶやいた。

「今月末がしめきり切なのです。いそがしいのです。」

私の運命がこのとき決した。いま考えても不思議なのであるが、なぜ私は、あのような要らないことを眩かねばならなかったのであろう。人間というものは、あわてればあわてるほど、へまなことしか言えないものなのだろうか。いや、それだけではない。私がその頃、どれほど作家にあこがれていたか、そのはかない渴望の念こそ、この疑問を解く重要な鍵なのではなからうか。

ああ、あの間拔けた一言が、私に罪を犯させた。思ひ出すさえ恐ろしい殺人の罪を犯させた。しかも誰ひ

とりにも知られず、また、いまもって知られぬ殺人の罪を。

私は、その夜、番頭の持つて来た宿帳に、ある新進作家の名前を記入した。年齢二十八歳。職業は著述。

三

二三日ぶらぶらしているうちに、私にも、どうやら落ちつきが出て来た。ただ、名前を変えたぐらい、なんの罪があるものか。万が一、見つかったとしても、冗談だとして笑ってすませることである。若いときに

は、誰しもいちどはやることなのにちがいない。そう
思つて落ちついた。しかし、私の良心は、まだうずう
ずしていた。大作家の素質に絶望した青年が、つまら
ぬ一新進作家の名をかたつて、せめても心やりにして
いるということは、実にみじめで、悲惨なことではな
いか、と思えば、私はいても立つても居られぬ気持で
あつた。けれども、その慚愧ざんきの念さえ次第にうすらぎ、
この温泉地へ来て、一週間目ぐらいには、もう私はまっ
たくのんきな湯治客になり切つていた。新進作家とし
ての私へのもてなしが、わるくなかつたからである。
私の部屋へ来る女中の大半は、私に、「書けますでしょ

うか。」とおそるおそる尋ねるのだった。私は、ただなごやかな微笑をもってむくいるのだった。朝、私が湯殿へ行く途中、逢う女中がすべて、「先生、おはようございませう。」と言うのだった。私が先生と言われたのは、あとにもさきにもこのときだけである。

作家としての栄光の、このように易々^{やすやす}と得られたことが、私にとって意外であった。窮すれば通ず、という俗言をさえ、私は苦笑しながら呟いたものであった。もはや、私は新進作家である。誰ひとり疑うひとがなかった。ときどきは、私自身でさえ疑わなかった。

私は部屋の机のうえに原稿用紙をひろげて、「初恋

の記」と題目をおおきく書き、それから、或る新進作家の名前を——いまは私の名前を、書き、それから、二三行書いたり消したりして苦心の跡を見せ、それを女中たちに見えるように、わざと机のうえに置きっぱなしにして、顔をしかめながら、そとへ散歩に出るのだった。

そのようなことをして、私はなおも二三日を有頂天になつてすごしたのである。夜、寝てから、私はそれでも少し心配になることがあつた。若し、ほんものがこの百花楼へひよつくりやつて来たら、と思うと、流石さすがにぞつとするのであつた。そんなときには、私の

ほうから、あいつは贗物だと言つてやろうか、とも考
えた。少しずつ私は凶太くなつていたらしいのである。
不安と戦慄せんりつのなかのあの刺すようなよろこびに、私は
うかされて了つたのである。新進作家になつてから
は、一木一草、私にとって眼あたらしく思えるのだつ
た。海岸をステッキ振り振り散歩すれば、海も、雲も、
船も、なんだかひと癖ありげに見えて胸がおどるの
だった。旅館へ帰り、原稿用紙にむかつて、いたずら
がきして居れば、おのれの文字のひとつひとつが、額
縁に収めるにふさわしく思えるのだった。文章ひとつ
ひとつが、不朽のものらしく感じられるのだった。そ

んなゆがめられた歓喜の日をうかうかと送っているうちに、私は、いままでいちども経験したことのない大事件に遭遇したのである。

四

恋をしたのである。おそい初恋をしたのである。私のたわむれに書いた小説の題目が、いま現実になって私の目の前に現われた。

その日私は、午前中、原稿用紙を汚して、それから、いらいらしたような素振りをしてながら宿を出た。赤根

公園をしばらくぶらついて、それから、昼食をたべに街へ出た。私は、「いでゆ」という喫茶店にはいった。いまは立派な新進作家であるから、むかしのようによどおどしなかった。じっさい、私にとって、十日ほどまえの東京の生活が、十年も二十年ものむかしのように思われていたのである。もはや私は、むかしのような子供でなかった。

「いでゆ」には、少女がふたりいた。ひとりには、宿屋の女中あがりらしく、大きい日本髪をゆい、赤くふくれた頬をしていた。私は、この女には、なんの興味も覚えなかったのであるが、いまひとりの少女、ああ、

私はこの女をひとめ見るより身内のさつと凍るのを覚えた。いま思うと、なんの不思議もないことなのである。わかい頃には、誰しもいちどはこんな経験をするものなのだ。途上ですれちがったひとりの少女を見て、はつとして、なんだか他人でないような気がする。生れぬまえから、二人が結びつけられていて、何月何日、ここで逢う、とちやんときまっていたのだと合点する。それは、青春の靈感と呼べるかも知れない。私は、その「いでゆ」のドアを押しあけて、うすぐらいカウンタア・ボックスのなかに、その少女のすがたを見つけるなり、その青春の靈感に打たれた。私は、それでも

新進作家らしく、傲然ごうぜんとドア近くの椅子に腰かけたのであるが、膝がしらが音のするほどがくがくふるえた。私の眼が、だんだん、うすくらがりうすくらがりに馴れるにしたがい、その少女のすがたが、いよいよよくつきり見えて来た。髪を短く刈りあげて、細い頬はなめらかだった。

「なになさいます?」

きよらかな声であると私は思った。

「ウイスキー。」

私は、誰かほかのお客がそう答えたのだと思った。しかし、客は私ひとりなのである。そのときは、流石さすがに慄然とした。気が狂ったなと思った。私は、うつろ

な眼できよろきよろあたりを見まわした。しかし、ウイスキーのグラスは日本髪の少女の手で私のテエブルに運ばれて来た。

私は当惑した。私はいままで、ウイスキーなど飲んだことがなかったのである。グラスをしばらく見つめてから、深い溜息とともにカウンタア・ボックスの少女の方をちらと見あげた。断髪の少女は、花のように笑った。私は荒鷺あらわしのようにたけりたけって、グラスをつかんだ。飲んだ。ああ、私はそのときのほろにがい酒の甘さを、いまだに忘れることができないのである。ほとんど、一息に飲みほした。

「もう一杯。」

まったく大人のような凶太さで、私はグラスをカウ
ンタア・ボックスの方へぐつと差しだした。日本髪の
少女は、枯れかけた、鉢の木の枝をわけて、私のテエ
ブルに近寄った。

「いや、君のために飲むのじゃないよ。」

私は追い払うように左手を振った。新進作家には、
それぐらいの潔癖があってもいいと思つたのである。

「ごあいさつだわねえ。」

女中あがりらしいその少女は、品のない口調でそう
叫んで、私の傍の椅子にべったり坐った。

「はっはっはっは。」

私はひとくせありげに高笑いした。酔ぱらう心の不思議を、私はそのときはじめて体験したのである。

五

たかがウイスキー一杯で、こんなにならしく酔ぱらったことについては、私はいまでも恥かしく思っている。その日、私はとめどなくげらげら笑いながら、そのまま「いでゆ」から出てしまったのであるが、宿へ帰って、少しずつ酔のさめるにつれ、先刻の私の間

抜けとも阿呆あほうらしいともなんとも言いようのない狂態
に対する羞恥しゆうちと悔恨の念で消えもいりたい思いをした。
湯槽ゆそうにからだを沈ませて、ぱちやぱちやと湯をはねか
えらせて見ても、私の部屋の畳のうえで、ごろごろと
寝ねがえりを打って見ても、私はやはり苦しかった。わ
かい女のまえで、白痴に近い無礼を働いたということ
は、そのころの私にとって、ほとんど致命的でさえあつ
たのである。

どうしよう、どうしよう、と思ひ悩んだ揚句あげく、私は
なんだか奇妙な決心をした。「初恋の記」——私が或
る新進作家の名前でもって、二三行書きかけているそ

の原稿を本気に書きつづけようとしたのであった。私はその夜、夢中で書いた。ひとりの不幸な男が、放浪生活中、とあるいぶせき農家の庭で、この世のものではないと思われるほどの美少女に逢った物語であった。そして、その男の態度は、あくまでも立派であり、英雄的でさえあったのである。私は、これに依って、ひそかに私自身の大失敗をなぐさめられたいと念じていたのであった。昼に見た「いでゆ」の少女に対するこらえにこらえていた私の情熱が、その農家の娘に乗りうつり、われながら美事な物語ができたのである。私はいまでもそう信じているのであるが、あのような口

マンスは、おそらくは私が名前を借りたその新進作家ですら書けないほどの立派なできればえだったのである。

夜のしらじらと明けそめたころ、私はその青年と少女とのつつましい結婚式の描写を書き了えた。私は奇しきよろこびを感じつつ、冷たい寢床へもぐり込んだ。

眼がさめると、すでに午後であった。日は高くあがっていて、たこ 風の唸りうながいくつも聞えた。私はむつきり起きて、前夜の原稿を読み直した。やはり傑作であった。私はこの原稿が、いまずぐにでも大雑誌に売れるような気がした。その新進作家が、この一作によって、いよいよ文運がさかんになるぞと考えたので

ある。

もはや私にとって、なんの恐ろしいこともない。私は輝かしき新進作家である。私は、からだじゅうにむくむくと自信の満ちて来るのを覚えた。

その日の夕方、私は二度目の「いでゆ」訪問を行った。

六

私が「いでゆ」のドアをあけたとたん、わっと笑い崩れる少女たちの声が聞えた。私はどぎまぎして

了った。ひらっと私の前に現れたのが、昨日の断髪の少女であつた。少女は眼をくるつと丸くして言った。

「いらつしやいますし。」

少女の瞳のなかに、なんの侮蔑も感じられなかつた。それが私を落ちつかせた。それでは、昨日の私の狂態も、まんざら大失敗ではなかつたのか。いや、失敗どころか、かえつてこの少女たちに、なにか勇敢な男としての印象を与えたのかも知れない。そう自惚うぬぼれて私は、ほつと溜息ついて、傍の椅子に腰をおろした。

「きようは、私、サアヴィスしないことよ。」

日本髪ニッポンカミの少女は、そう言つていやらしく笑いこけた。

「いいわよ。」断髪の少女が長い袖そでで日本髪にっぽんかみの少女をぶつ真似をした。「私がするわよ。ねえ、私、だめ？」

「ふたり一緒がいい。」

私は、酒も飲まぬうちに酔っぱらっていた。

「あら！ 欲ばりねえ。」

断髪が私をにらんだ。

「いや、慈悲ぶかいんだ。」

「うまいわねえ。」

日本髪が感心した。

私は面目をほどこして、それからウイスキーを命じた。

私は、私に酒飲みの素質があることを知った。一杯のんで、すでに酔った。二杯のんで、さらに酔った。三杯のんで、心から愉快になった。ちつとも気持がわるいことはないのである。断髪の少女が、今夜は私の傍につききりであった。いよいよ、気持がわるい筈はないのである。私の不幸な生涯を通じて、このときほど仕合せなことはいちどもなかった。けれども私は、その少女と、あまり口数多く語らなかつた。いや、語れなかつた。

「君の名は、なんて言うの？」

「私、雪。」

「雪、いい名だ。」

それからまた三十分も私たちは黙っていた。ああ、黙っていても少女が私から離れぬのだ。沈黙のうちに瞳ひとみが物語るこのよろこび。私が昨夜書いた「初恋の記」にも、こんな描写がたくさんたくさんあったのだ。夜がふけるとともにお客がぼつぼつ見えはじめた。やはり雪は、私の傍を離れなかったけれど、他のお客に対する私の敵意が、私をすこし饒舌じょうぜつにした。場のにぎやかな空気が私を浮き浮きさせたからでもあったろう。

「君、僕の昨日のどこね、あれ、君、僕を馬鹿だと思っ

たろう。」

「いいえ。」雪は頬を両手でおさえて微笑ほほえんだ。「しゃれてると思っただわ。」

「しゃれてる？ そうか。おい、君、ウイスキーもう一杯。君も飲まないか。」

「私、飲めないの。」

「飲めよ。きょうはねえ、僕、うれしいことがあるんだ。飲めよ。」

「では、すこうし、ね。」

雪は、そう言ってカウンタア・ボックスに行つて、二つのグラスにウイスキーをなみなみとたたえて持つ

て来た。

「さあ、乾杯だ。飲めよ。」

雪は、眼をつぶつてぐつと飲んだ。

「えらい。」私もぐつと飲んだ。「僕ね、きょうはとも、うれしいんだ。小説は書きあげたし。」

「あら！ 小説家？」

「しまった。見つけられたな。」

「いいわねえ。」

雪は、酔っぱらったらしく、とろんとした眼をうつとり細めた。それから、この温泉地に最近来たことのある二三の作家の名前を言った。ああ、そのなかに私

の名前もあるではないか。私は、私の耳をうたがった。酔がいちじに醒める気がした。ほんものがこのまちに來ている。

「君は、知っているの？」

私は、こんな場合に、よくもこんなに落ちつけたものだ、といまでも感心している。臆病者というものは、勇士と楯のうらおもてぐらいのちがいがいしかないものらしい。

「いいえ。見たことがないわ。でもいま、そのかた、百花楼に居られるつて。あなた、おともだち？」

私は、ほっと安心した。それでは、私のことだ。百

花楼のおなじ名前の作家がふたりいる筈がない。

「どうして百花楼にいることなんか知れたんだろう。」

「それあ、判るわ。私、小説が少し好きなの。だから、気をつけてるの。宿屋のお女中さんたちから聞いたわ。なんと言ったって、狭いまちのことだもの。それあ、判るわ。」

「君は、あいつの小説、好きかね。」

私は、わざと意味ありげに、にやにや笑った。

「大好き。あの人の花物語という小説、」言いかけて、ふっと口を噤つぶんだ。「あら！ あなたただわ。まあ、私、どうしよう。写真で知ってるわよ。知ってるわよ。」

私は夢みる心地であった。私が、かの新進作家と似ているとは！しかし、いまは躊躇ちゆうちゆうするときでない。

私は機を逸せず、からからと高笑いした。

「まあ、おひとが悪いのねえ。」少女は、酒でほんのり赤らんでいる頬をいっそう赤らめた。「私も馬鹿だわねえ。ひとめ見て、すぐ判らなければ、いけない筈なのに。でも、お写真より、ずっと若くて、お綺麗きれいなんだもの。あなたは美男子よ。いい顔だわ。きのうおいでになったとき、私、すぐ。」

「よせ、よせ。僕におだては、きかないよ。」

「あら、ほんと。ほんとうよ。」

「君は酔っぱらってるね。」

「ええ、酔っぱらってるの。そして、もっと、酔っぱらうの。もっともっと酔っぱらうの。けいちやあん。」
他のお客とふざけている日本髪の少女を呼んだ。「ウイスキーお二つ。私、今晚酔っぱらうのよ。うれしいことがあるんだもの。ええ、酔っぱらうの。死ぬほど酔っぱらうの。」

七

その夜、私は酔いしれた雪を、ほとんど抱きかかえ

るようにして、「いでゆ」を出た。雪は、私を宿まで送つてやると言い張るのである。いちめん霜のおりたまちはしずかにしずまっていた。ひとめにかからず、かえって仕合せであると私は思った。そとへ出て冷たい風に当たると、私の酔はさつと醒めた。いや、風のせいだけではなかった。酔いしれた少女のからだのせいでもあった。しつとりと腕に重い、この魚のようにはつらつとした肉体の圧迫に、私は酔心地どころではなかった。幸福にもまちで誰にも見つからずに私たちは百花楼の門まで来た。大きい木の門は固くとぎさされていた。私は当惑した。

「おい、困った。門がしまっているんだ。」

「たたいたらいいんですよ。」

雪は、私の腕からするつとぬけて、ふらふら門へ近寄った。

「よせ、よせ。恥かしいよ。」

酔った女をつれて、夜おそく宿の門をたたいたとあれば、だいいち新進作家としての名誉はどうなる、死んでもそのようなさましいことはできない。

「おい、君、もう帰れよ。君は、いでゆに寝泊りしているんだらう？　こんどは僕が送って行ってやるよ。帰れよ。あした、また遊ぼう。」

「私、いや。」雪は、からだをはげしくゆすぶった。「いや、いや。」

「困るよ。じゃ、ふたりで野宿でもしようと言うのか。困るよ。僕は、宿のものへ恥かしいよ。」

「ああ、いいことがあるわ。おいでよ。」

雪は手をびしゃと拍うって、そう言ってから、私の着物の袖そでをつかまえ、ひきずるようにしてぱたぱた歩きだした。

「なんだ、どうしたんだ。」

私もよろよろしながら、それでも雪について歩いた。「いいことがあるの。でも恥かしいわ。あのね、百花

楼ではね、ときどきお客が女のひとを連れこむのに、
いやよ、笑っちゃ。」

「笑つてやしないよ。」

「そんな入口があるのよ。ええ、秘密よ。湯殿のここからはいるの。それは、宿でも知らぬふりしているの。私、でも、話に聞いただけよ。ほんとのことは知らないわ。私、知らないことよ。あなた、私を、みだらな女だと思つて。」

変に真面目な口調だった。

「それあ、判らん。」

私は意地わるくそう答えて、せせら笑つた。

「ええ、みだらな女よ。みだらな女よ。」

雪はひくくそうこぼ泣いてから、ふと立ちどまって泣きだした。「どうせ、私は。でも、でも、たった一度、うん、たった二度よ。」

私はわれを忘れて雪を抱きしめた。

八

その謂いわば秘密の入口から、私はまだ泣きじやくつている雪をかかえて、こっそりと私の部屋へはいった。

「静かにしようよ。他に聞えると大変だ。」

私は雪を坐らせて、なだめた。酔は、まったく醒めていた。

雪の泣きはらした眼には、電燈の明るい光がまぶしいらしく、顔からちよつと手を離したが、またすぐひたと両手で顔を被った。

寒さに赤くかじかんだ手の蔭から囁いた。

「私を軽蔑して？」

「いや！」私もむきになって答えた。「尊敬する。君は、神さまみたいだ。」

「うそよ。」

「ほんとうだ。僕は君みたいな女が欲しくて、小説を

書いてるのだよ。僕は、ゆうべ初恋の記という小説を書いたけれど、これは、君をモデルにして書いたのだ。僕の理想の女性だ。読んでみないか。」

私は机のうえの原稿をとりあげて、どたりと雪の方へなげてやった。

雪は顔から手を離して、それを膝ひざのうえにひろげた。

ああ、そこには、私の名前でない男の名が、いや、ほんとうは私の名が、おおきく書かれていた。雪は、溜息ためいきついて黙読をはじめた。私は、机のそばに坐つて、ひっそりと机に頬杖つき、わが愛読者の愛すべき横顔を眺めた。ああ、おのれの作品が眼のまえで、むさぼ

るように読まれて居るのを眺めるこの刺すような歓喜！

雪は二三枚読むと、なんと思つたか、ぱつと原稿を膝から払いのけた。

「だめ。私読めないの。まだ酔っぱらっているのかしら。」

私はいたく失望した。たとえ、どのように酔つていたらとて、一行読みだすと、たちまちに酔も醒めて、最後の一行まで、胸のはりさける思いでむさぼり読まれ^{しか}て然るべき傑作ではないか。ウイスキー二三杯ぐらいの酔のために、膝からはらいのけるとは！

私は泣きたくなつた。

「面白くないのか？」

「いいえ、かえつて苦しいの。私あんなに美しくないわ。」

私は、ふたたび勇気を得た。そうだ、傑作にはそのような性格もあるのだ。よすぎて読めない。これは有り得る。そう安心すると、私は雪に対して、まえよりも強い、はばのひろい愛情を覚えたのだつた。恋愛に憐憫の情がまじると、その感情はいつそうひろがり高まるものらしい。

「いや、そんなことはない。君の方が美しい。顔の美

しきは心の美しさだ。心の美しいひととは必ず美人だ。女の美容術の第一課は、心のたんれんだ。僕はそう思うよ。」

「でも、私、よごれているのよ。」

「判らんなあ。だから。言ってるじゃないか。からだは問題でないんだ。心だよ、心だよ。」

そう言いながら、私はわくわく興奮しだした。雪の傍にある原稿をひったくって、ぴりぴりと引き裂いた。

「あら！」

「いや、いいんだ。僕は君に自信をつけてやりたいのだ。これは傑作だ。知られざる傑作だ。けれども、ひ

とりの人間に自信をつけて救ってやるためには、どんな傑作でもよろこんで火中にわが身を投ずる。それが、ほんとうの傑作だ。僕は君ひとりのためにこの小説を書いたのだ。しかしこれが君を救わずにかえって苦しめたとすれば、僕は、これを破るほかはない。これを破ることで、君に自信をつけてやりたい。君を救ってやりたい。」

私は、なお尚も、原稿を裂きつづけた。

「判ったわよ。判ったわよ。」雪は声をたてて泣きだした。泣きながら叫んだ。「私、泊るわ。ねえ、泊らしてよ。もつともつと。話を聞かしてよ。私、泊るわ。」

かまうものか。かまうものか。」

九

そのように善良な雪を、なぜ私が殺したのか！ ああ、私は、一言も弁解ができない。なにもかも、私が悪い！ 虚栄の子は、虚栄のために、人殺しまでしなければいけない。私は私の過去に犯した大罪を、しらじらしく、小説に組みたてて行くほどの、まだそれほどの破廉恥漢ではない。以下、私は、祈りの気持で、懺悔の心で、すべてをいつわらずに述べてみよう。

私が雪を殺したのは、すべて虚栄の心からである。その夜、私たちは、結婚のちぎりをした。私の知られざる傑作「初恋の記」のハッピー・エンドにくらべて、まさるとも劣らぬ幸福な囁きささやを交した。私は、結婚を予想せずに女を愛することができなかつた。

翌朝、私は、雪と一緒に、またこつそり湯殿のおかげの小さいくぐり戸から外へ出たのである。なぜ、一緒に出たのであろう。わかい私には、そのような一夜を明して、女をひとりすげなく帰すのは、許しがたい無礼であると考えられたのである。夜明けのまちには、人ひとり通らなかつた。私たちは、未来のさまざま

幸福を語り合つて、胸をおどらせた。私たちは、いつまでもそうして歩いていたかった。雪は旅館の裏山へ私を誘つた。私も、よろこんでついて行つた。くねくね曲つた山路をならんでのぼりながら、雪は、なにかの話のついでに、とつぜん或る新進作家の名前で私を高く呼んだ。私は、どきんと胸打たれた。雪の愛している男は私ではない。或る新進作家だったのだ。私は目の前の幸福が、がらがらと音をたてて崩れて行くのを感じたのである。ここで私は、すべてを告白してしまつたら、よかつたのである。すくなくとも雪を殺さずにすんだのかも知れない。しかし、それができな

かった。そんな恥かしいことは死ぬるともできなかつた。私はおのれの顔が蒼あおざめて行くのを、自身ではつきり意識した。

雪も流石さすがに、私のそんなうち沈んだ様子に不審をいだいたらしかつた。

「どうなすつたの？ 私、判るわ。いやになつたのねえ。あなたの花物語という小説に、こんな言葉があつたわねえ。一目見て死ぬほど惚れて、二度目には顔を見るさえいやになる、そんな情熱こそはほんとうに高雅な情熱だつて書かれていたわねえ。判つたわよ。」

「いや、あれは、くだらん言葉だ。」

私は、あくまでも、その新進作家をよそわねばならなかった。どうせ判ることだ。まっかな贗物だと判ることだ。ああ、そのとき！

私は、できるだけ平静をよそつて、雪のよろこびそ
うな言葉をならべた。雪は気嫌きげんを直した。私たちは、
山の頂きにたどりついた。すぐ足もとから百丈もの断
崖になっていて、深い朝霧の奥底に海がゆらゆらうご
いていた。

「いい景色でしょう？」

雪は、晴れやかに微笑みつつ、胸を張って空気を吸
いこんだ。

私は、雪を押した。

「あ！」

口を小さくあけて、嬰兒えいじのようなべそを搔かいて、私をちらと振りむいた。すつと落ちた。足をしたにしてまっすぐに落ちた。ぱつと裾すそがひろがった。

「なに見てござる？」

私は、落ちついて振りむいた。山のきこりが、ひっそり立っていた。

「女です。女を見ているのです。」

年老いたきこりは、不思議そうな面持で、崖のしたを覗のぞいた。

「や、ほんとだ。女が浪き打ちよせられている。ほんとだ。」

私はそのときは放心状態であつた。もし、そのきこりが、お前がつき落したのだろうと言つたら、私はそうだと答えたにちがいない。しかし、それは、いまにして判つたのであるが、そのきこりが、私を疑えない筈だつた。それは断崖の百丈の距離が、もたらして呉れた錯覚である。たつたいま手をかけて殺した男が、まさか、これほど離れた場所に居れる筈がない。私が、^{ママ}当前、^{ママ}山の上を散歩していたということは、私の^{アリバイ}不在証明にさえなるかも知れぬ。このような滑稽な錯

覺が現實にままあるらしい。きこりは私を忘れて、山のきこり仲間にふれ歩いた。それから雪の死体を海から引きあげるのに三時間以上をついやした。断崖のしたの海岸まで行くのには、どうしても、それだけの時間がかかるのである。私は、ひとりぼんやり山を降りた。ああ、しかし内心は、ほっとしていたのである！これでもう何もかも、かたがついた。私はなんの恥辱も受けない。もう東京へ帰ろう。雪が、ゆうべ私のところへ泊ったことは誰も知らぬ。私は、いま、ただ朝の散歩から帰ったところだ。「いでゆ」でも雪のほかは、私のにせの名前も居どころをさえ知らない。知れない

うちに東京へ帰ろう。東京へ帰ったならば、もうしめたものだ。ああ、私が本名を言わずに、他人の名前を借りたことが、こんなときに役立とうとは。

十

万事がうまく行つた。私は、わざと出発をのばして、まちの様子をひそかにさぐつた。雪が酒に酔つて、海岸を散歩して、どこかの岩をふみすべつたのだろう、と言うことにきまつた。雪は海の深いところに落ちこんだらしく、さのみ怪^け我^がしていなかつたようだ。客を

送って出たというがそれは雪の酔っぱらったときの癖で、誰をでも送って行くのだそうだ。そんな、だらしない癖が、いけなかったと、宿のものも言っていた。その客は、東京のひとだそうだ、となにげなきそうに言っていた。もはや、ぐずぐずして居られぬ。私は、ゆっくり落ちつきながら、尚いちにち泊って、それから東京へ帰った。

万事がうまく行ったのである。すべて断崖のおかげであった。断崖が高すぎたのである。もし、十丈の断崖だったら、或いは、こんなことにならなかつたかも知れぬ。しかし、私ときこりの見た雪は、ただぼんや

りした着物の赤い色だけであつた。一瞬にして、ふたつの物体が、それこそ霞をへだてて離れ去り得る、このなんでもない不思議が、きこりには解けなかつたのであろう。

それから、五年経っている。しかし、私は無事である。しかし、ああ、法律はあざむき得ても、私の心は無事でないのだ。雪に対する日ましにつのるこの切ない思慕の念は、どうしたことであろう。私が十日ほど名を借りたかの新進作家は、いまや、ますます文運隆々ときかえて、おしもおされもせぬ大作家になつていたのであるが、私は、——大作家になるにふさわしき、

殺人という立派な経験をさえた私は、いまだにひとつの傑作も作り得ず、おのれの殺した少女に対するやるせない追憶にふけりつつ、あえぎあえぎその日を送っている。

(完)

底本…「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1989（昭和64）年6月27日第1刷発行

底本の親本…「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6
月

入力…柴田卓治

校正…石川友子

2000年4月19日公開

2004年3月4日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。